３．１１を語る女性の集い

実 施 報 告 書

平成 23 年９月

仙台市市民局男女共同参画課

目　次

１　「3.11 を語る女性の集い」概要‥‥‥1

２　「3.11 を語る女性の集い」記録‥‥‥3

３　アンケート集計結果‥‥‥‥‥‥‥‥‥33

（資料）

募集チラシ

次第

アンケート用紙

１　「３．１１を語る女性の集い」概要

開催日時：平成２３年７月６日（水）１８：３０～２０：４５
開催場所：エル・パーク仙台　セミナーホール１・２
参加人数：６９名
参 加 者：（アンケート回収５９名）

○　年代

20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上	無回答
2 名	7 名	5 名	13 名	17 名	13 名	2 名
3.4%	11.9%	8.5%	22.0%	28.8%	22.0%	3.4%

○　所属

パート・アルバイト	4 名	6.8%	男女共同参画推進団体	4 名	6.8%
会社員	4 名	6.8%	主婦	15 名	25.4%
公務員	1 名	1.7%	自営業	4 名	6.8%
NPO 職員	4 名	6.8%	無職	7 名	11.9%
学校関係	2 名	3.4%	その他	8 名	13.6%
専門職	2 名	3.4%	無回答	4 名	6.8%

○　住所

青葉区	宮城野区	若林区	太白区	泉区	その他	無回答
18 名	4 名	13 名	8 名	12 名	3 名	1 名
30.5%	6.8%	22.0%	13.6%	20.3%	5.1%	1.7%

参加者からの主な意見等：

○　困ったこと（助かったこと）

・指定避難所以外の場所に避難したが、情報や物資が来なくて大変だった。
・避難した側から情報を発信する方法もわからず、行政からの情報も来ず、情報や物資を得るためのコミュニケーション不足がとても困った。
・避難所には市からのニュースや情報が意外と届いていた。
・ボランティアをしたかったが、どうやったらいいのか分からなかった。
・職場にいた時に被災したため、子どもが心配だけど、仕事があって帰れなかった。
・ご近所との情報交換で、水のある場所を教えていただいたのでとても助かった。
・西宮の知り合いから届けられた物資が適切なものだった。

○　震災後にしたこと

・民生委員がボランティアの学生達と協力して、一人暮らしの方に水や食糧を運んだ。
・近くの避難所に子どもの絵本を届ける活動をした。
・集会所の中にお米やプロパンガスのガス釜などを持ち込んで、そこに泊まった人たちに手伝ってもらってオニギリを作った。地域の食堂などお店をやっている人からも、冷蔵庫が使えないからといろいろな物資が提供された。
・地域の女性達でオニギリを作ったりいろいろなおかずを作ったり、とても仲良くなれた。
・避難所で、女性が下着をなかなか取り替えられないとか、洗濯する場所がないとか、女性の困っている状況を拾い上げ、洗濯をするボランティアを募集した。

○　今後の防災や復興に向けて

（行政にしてほしいこと）

・地域により避難所運営の取組みに差があったので、決め細やかなマニュアルを整備してほしい。
・指定避難所以外も状況に応じて避難所にできるような柔軟な対応をしてほしい。
・小さな子どもから高齢者まで、一ヶ所の避難所で対応することは無理なので、それぞれに応じた避難所を開設してほしい。
・生活に根ざした視点から、いろいろなパターンでのきめ細かい防災計画を作るべき。
・行政職員が避難所を回るときは、男女ペアで、なるべく同じ人が継続的に来てもらいたい。話がしやすいし避難所内の変化もわかる。
・防災マップをもっと市民に知らせて欲しい。震災の経験を後世に残してほしい。
・建物の耐震や宅地開発の基準など、次世代につながる基準を作ってほしい。

（私が取組みたいこと）

・自分でも災害に備えて備蓄をするべきだ。
・水があまりなくても調理できるようなものを工夫したい。
・電池がなくても使える手回しライトが有効だった。
・家族で同じ会社の携帯電話を使用すると割引があり便利だが、使えなくなるときはみんな使えなくなるので、会社をバラバラにするのもいいかもしれない。
・自分も身近な人への支援に取組みたい。

（地域で取組みたいこと）

・町内会の避難訓練は、いろいろな状況を想定してやったほうがいい。男手がないとき、夜間のとき、子どもたちしかいないときなど。
・普段からの近所の付き合いが大事。
・町内会とは違う、住民による防災組織が必要ではないか。
・隣近所２～３軒は、生存を確認できるようにしたらどうか。
・行政に頼り過ぎない、自分たちでできることをやるようにしたい。

２　「３．１１を語る女性の集い」記録

⑴　当日の流れ

○　開会
○　奥山市長からのあいさつ
○　ワークショップの進め方の説明
○　ワークショップ
　①　「３月 11 日　そのときあなたは」
　②　「震災から１ヶ月　何をして何を思ったか」
　③　「震災の復興に向けて、また地域の防災上必要な取組みはどのようなことか」
○　意見交換
○　閉会

⑵　進行経過

○　開　会

〔司　会〕

こんばんは。時間になりましたので、「3.11 を語る女性の集い」を始めたいと思います。今日、司会をさせていただく仙台市役所男女共同参画課の髙橋と申します。よろしくお願いします。

それでは、始まりにあたりまして、奥山仙台市長よりご挨拶申し上げます。

○　奥山市長からのあいさつ

〔市　長〕

改めまして皆様、お晩でございます。今日は、東日本大震災「3.11 を語る女性の集い」ということで呼びかけをさせていただいたところ、こんなにも多くの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

この度の震災では、皆様本当に様々なご苦労をされたと思います。直接に被災され方もいらっしゃれば、また知り合いの方やご親戚の方が被災されて、いろいろな係わりの中でご苦労があったかと思います。仙台市はご存知のとおり、震災からの復興計画を現在作っているということで、いろいろなまちづくりに関するご意見などもいただいております。私も意見交換会に出る訳ですが、全体的にかなり女性の参加は少ない状況でございます。勿論、全くいらっしゃらないという訳ではありませんが、少ないという状況です。家庭や職場が被災されたり、あるいは地域の中で、例えば高齢の方や一人暮らしの方を見守っていらっしゃったり、いろいろなご経験が女性の方はある

はずなのに、そうしたことが表に出てこないことはとても残念なことではないかと私自身は感じております。

今日は、皆様が３月 11 日、またその後の時間の中でお考えになったことやお気づきになったことをお話しいただいて、これから私達が防災について考える時、まちづくりをしていく時に必要なたくさんの知恵や教訓が得られるのではないかと期待しておりますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。お忙しい週半ばの夜にご参加いただいたことに感謝しながら、ご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございます。

○　ワークショップの進め方の説明

〔司　会〕

はじめに、配布しているお手元の資料について確認させていただきます。「次第」、「アンケート」、「各区で開催している復興まちづくり意見交換会でお渡ししているレジュメの資料」、「復興ビジョン」になります。

次に、今日の進め方をご説明したいと思います。サブタイトルで「市長とともに考えるワークショップ」と付けておりますけれども、グループ毎にワークショップをしながら進めていきます。私から、このテーマについてお話しくださいと申し上げます。テーブルの方に模造紙や付箋を置いてありますので、付箋にご自分のご意見を書いていただいて、それを用意してある模造紙に貼りながらお話ししていただきたいと思います。付箋の使い方ですが、一枚の付箋にたくさんのことは書かないで、一枚に一つのことを書いていくようにしてください。同じようなご意見が出た場合は、お話し合いをしながらまとめたりしていただくと良いと思いますが、まとめ方については皆様にお任せしたいと思います。

話し合いの後、いくつかのグループからどのような意見が出たのか発表していただいて、それに対して市長から皆様の意見を聞いての感想や疑問に対するご説明などを 10 分ぐらいお話しするということを繰り返したいと思います。その後、言い足りなかったことなどを発表していただいて、市長に最後のまとめをしていただきます。８時 45 分終了を目標に進めて行きたいと思いますので、よろしくお願いします。発表する方はグループの中で決めていただきますが、話し合いの内容について無理にまとめることはせずに、こういうお話がありましたということを発表していただければ結構です。大体２分ぐらいで発表していただければと思います。

それから、各グループの話し合いには、市長も参加させていただきます。皆様のグループを回りたいと思いますので、ご協力をお願いします。また、休憩時間は取りませんので、お手洗いに行きたい方などは、適宜抜けていただいて構いません。

○　ワークショップ

①　「3 月 11 日　その時あなたは」

〔司　会〕

最初のテーマは、次第の①「3 月 11 日　その時あなたは」です。順番にお名前と住んでいる場所、それからグループ活動などをしている方については所属などをお

話しください。そして、地震が起きた時にどちらにいらっしゃったかと、その夜はどこで過ごされたのかということをお話ししてください。

このテーマは、自由にお話ししていただければと思います。また、このテーマではグループ発表はしませんが、２つ目のテーマ以降からは発表していただきたいと思いますので、はじめにグループで司会をする方と発表する方とを決めてください。目安としては、6 時 50 分まで①のテーマについてお話ししていただきたいと思います。それでは、始めてください。

（各班にてワーク実施）

〔司　会〕

マスコミの取材が入っていますので、カメラに写りたくない、取材されたくない方は遠慮なくおっしゃっていただいて構いませんので、よろしくお願いします。あと、私どもの方でも記録のために写真を撮らせていただきますので、ご了解願います。

それでは、自己紹介を兼ねてどこで過ごしたかなどお話しいただきましたが、少しその様子をうかがいたいと思います。まず、ご自宅で過ごされたという方は何人ぐらいいらっしゃいますか。（挙手あり）

〔司　会〕

避難所の方に行きましたという方、いらっしゃいますか。（挙手あり）

〔司　会〕

ありがとうございます。職場で過ごした方はどうでしょうか。（挙手なし）

〔司　会〕

職場という方はいらっしゃらないですね。その他の場所で過ごしましたという方は、どうでしょう。（挙手あり）

〔司　会〕

どちらでお過ごしになりましたか。

〔参加者〕

一晩中あちこちに行ったので、寝ていませんでした。

〔司　会〕

今回、非常に大きな津波が来ましたが、津波を実際に体験しましたという方、この会場にいらっしゃいますか。（挙手あり）

〔司　会〕

とても大変だったと思うのですが、少し簡単にどんな状況だったかというのをお話しいただいてもいいですか。

〔参加者〕

若林区の六郷に住んでいます。有料道路の南の方で、海が見える田園地帯です。津波は防風林の倍ぐらいの高さで、サイレンが半分ぐらいしか聞こえませんでした。ラジオを聴いていると津波は10mと言いますけど、10m以上ですね。避難袋は家族分用意していましたが、持って行けずに身体一つで逃げました。小学校が満杯でしたが、中学校が受け入れてくれて、生徒達もまだいましたが椅子を出してくれ、もう子ども達が私達を大事に扱ってくれました。未だに避難所として滞在していて申し訳ないですが、本当にありがたいと思います。

② 「震災から１ヶ月　何をして何を思ったか」

〔司　会〕

それでは、次のテーマに移りたいと思います。二番目のテーマは、次第②「震災から１ヶ月　何をして何を思ったか」です。今日は仙台のいろいろな場所から、いろいろな立場の方がいらっしゃっていると思いますが、震災後、それぞれの方がいろいろな場所で過ごし、様々な体験をされたと思います。震災が起こってから１ヶ月間に何をしたか、また困ったことや考えたこと、気づいたこと、またボランティアなど地域でいろいろな支援の活動をされた方がたくさんいらっしゃると思います。その支援の中で限界を感じたことなどを、ピンクの付箋に書いて自由にお話ししてください。では、始めてください。

（各班にてワーク実施）

〔司　会〕

それでは、話し合った内容について、４つのグループから発表をしていただきたいと思います。１班から順に発表してもらいたいと思います。

〔１　班〕

１班には、本当に大変な思いをしている若林区の方が３人いらっしゃいました。本当に困ったこととして、避難所ではない場所に避難していたために情報や物資が来ないことなどがありました。こちらから情報を発信する方法も分からないし、行政からの情報も来ません。行政からの情報や物資を得るためのコミュニケーション不足が、一番困ったことでした。

〔３　班〕

３班では、日常が非日常であった、停電から電気が復旧して明かりを見た時には本当に泣けたなどいろいろな話がありました。被災者の支援では、近くの避難所に子ども向けの絵本を届けたり、高齢者の方々を巡回したり、給水活動などで積もった雪を溶かしてトイレ用として活用したという話もありました。プレイパークをしていた方からは、震災後１ヶ月の間に２回程プレイパークを開催したが、学校が休みということもあり、被災した子ども達が普通とあまり変わりなく来てくれて嬉しかったという話もありました。国際支援の活動をされている方は、被災地ではない場所にいたために申し訳なく、毎日ニュースを見て涙が止まらなかったということでした。今は、お寺を支援するために単身赴任で宮城県の方に住んでいるということで、とても心強く感じます。また、ガソリンのない中で片道 12.5km の道程を自転車で通い、自転車で高齢者のところを回ったという話もありました。私は福島から参加していますが、福島では原発事故のことを心配しております。やはり、情報がなかなか届かないということがありまして、自宅にいるとラジオからのニュースばかりですが、避難所に行くと市からのニュースや情報が届いていたという話もさせていただきました。

〔５　班〕

５班では、電気やガスといったライフラインが大変だったことは共通していることだと思いまして、それを乗り越えて何か手助けをしたことはないかということから話し合いを始めました。避難所で炊き出しを１ヶ月以上手伝っていただいた方、同じように避難所で洗濯ボランティアをされていた方のお話を聞きました。新聞報道で目にされた方もたくさんいるかと思いますが、女性の下着がなかなか取り替えられないとか、洗濯する場所がないとか、本当にその困っている状況は女性じゃないと分からないと思います。洗濯ボランティアは、それを一早く感じ取って、洗濯物を集めると同時に洗濯をするボランティアを募集して、皆さんのお役に立ったという話を聞くことができました。その他に、ご近所との情報交換で水のある場所を教えていただきとても助かった方もいらっしゃいました。また、様々な事情によりどうしても避難所に泊まることができなくて、友人宅を転々としてお世話になったという方もいました。本当に大変な中で、皆さんこの３ヶ月余りを過ごして来られたということが分かりました。

〔７　班〕

７班で話したことは４点ありました。

１点目は、やはり情報が入らないことですごく困ったという方が多かったことです。電話も繋がらない、電気も無い、インターネットもほとんど繋がらなかったため、周りの人どうなっているのかが本当に分からないことが大きな問題でした。

２点目は、震災後は避難所や周りの方を訪問したり、いろんな所に人を助けに行く方が多かったのですが、そのような時にボランティアをしたくても、どうやって行ったらいいのか分からない、いろんな所を回らないとやることが無かったりと、ボランティアの仕組みが最初は無かったのが不便だったということがありました。

３点目は、子どもがいる方々はケアがすごく大変だったということで、職場で被災して、子どもが心配だけど仕事があって帰れないなど、子どものことがすごく問題になっていました。

４点目ですが、ご家族の方が被災してしまうと心がすごく傷ついてしまうので、傷ついた時のフォローをどうしたらよいのかが問題点になりました。

〔司　会〕

まず、情報がなかなか届かなくて、とても困ったということが共通してあったと思います。それから、ライフラインが止まってしまい、とても困ったということでした。また、困ったことばかりではなく、ボランティアとしていろいろな活動された方達もたくさんいたようです。

これまで挙がった以外で、私こんなことしましたという方はいますか。

〔市　民〕

私は西宮で阪神・淡路の震災に遭っていまして、西宮からは震災後すぐにいろいろな物資が届けられました。例えば、家にあるカセットコンロなどを集めて箱に入れて送っていただくなど、本当に適切なものでした。このグループでもう１人神戸の方に随分助けられたという話があったので、ご報告します。

〔司　会〕

こちらのグループでは、民生委員さんとして活動されたお話をしていました。少し、話していただいてもよろしいですか。

〔市　民〕

私は亀岡町の民生委員です。民生委員は、一人暮らしの方を一番把握していますので、民生委員を集めて、ボランティアの学生の方達と協力して水や食糧を運びました。トイレがつまって水が出ないということで、もう毎日何回となく学生の方達には水汲みをしていただいて、すごく助かりました。民生委員の方々も、時々「不自由なことは無いですか」と町内を回って対処していました。

〔司　会〕

あと、今日は農業をされている方も何人か来られていますので、話していただければと思います。岡田から見えた方、いらっしゃいますか。

〔市　民〕

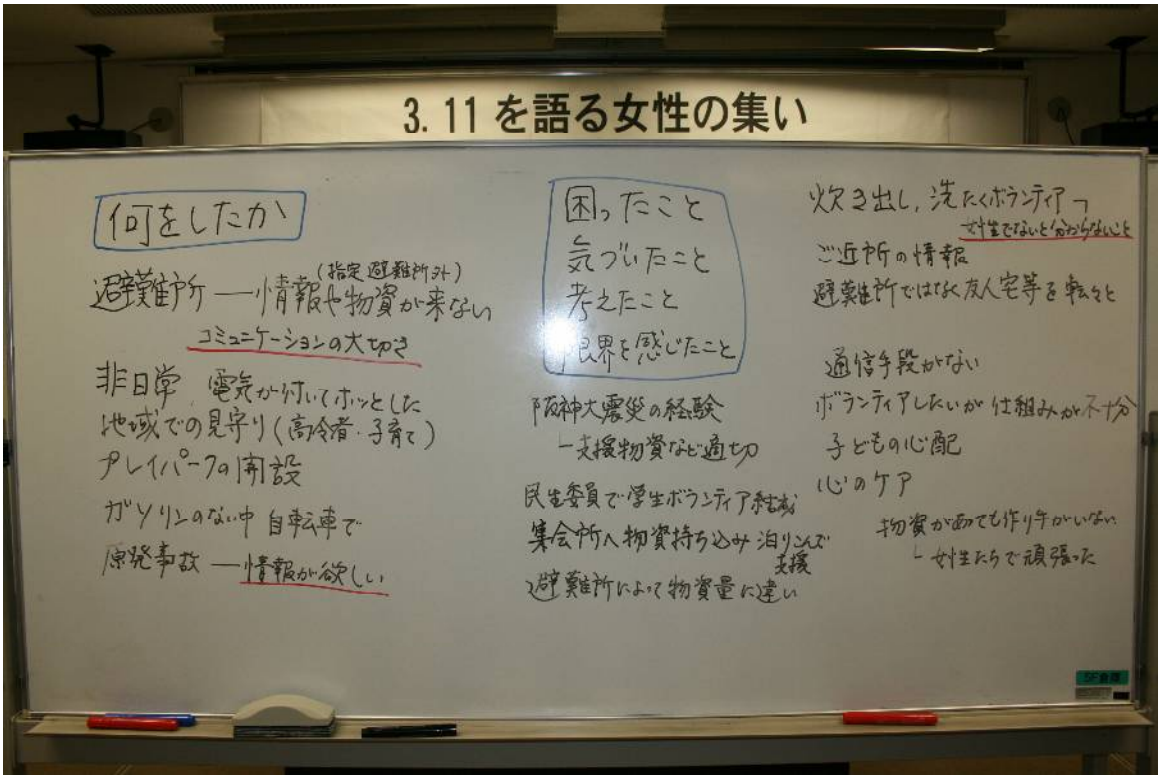
宮城野区の岡田から来ました。家は地震と津波の両方の被害に遭い、岡田地区で60 名ぐらい亡くなりました。しかし、マスコミにはほとんど取り上げられず、次の日からは原発のニュースばかりでした。

私の家は、岡田地区でも産業道路に近い場所です。自宅は地震により半壊となりましたが、津波はすぐ目の前の田んぼまでで浸水はしませんでした。それで、指定避難所ではないのですが、近くの集会所を避難所としました。岡田小学校の近くまで津波が来ていたため、車は全部ストップとなりました。家に帰れない方や津波に流された方などいろいろな方が集会所に来たので、ストーブを焚いて自家発電を行いました。主人が町内会でずっと役員をやっていてので、また農家だったので家からお米を持ってきて、それからプロパンガスのガス釜など大きな物も持ち込んで、そこに泊まった方々にお手伝いをしてもらってオニギリを作って、震災の日の夜から出しました。1 日 3 食提供し、5 日間泊り込みで続けました。地域の中の食堂をやっている方々からも、電気が切れて冷蔵庫が使えないことから、いろいろな物資をいただき、それを各町内会に全部配布しました。

岡田地区では、12、13 世帯が全壊となった家屋です。あとは大規模半壊や半壊です。津波が来なかっただけでもよかったのですが、岡田地区の 5 つの集落は全て崩壊したような感じです。大体の方はまとまって仮設には入っていますが、あちこちのアパートに入っている方もいれば、町内会長さんは自分の家を直して入るなど、全然まとまりが無い状態です。

避難所を閉鎖した後ですが、高砂市民センターにも 1,200 人ぐらい避難者がいて、指定避難所でないために市から物資が全然来なくて苦労しているということを聞いたので、12、3 日間ご飯だけ炊いてお届けすることをしていました。その後、毎日では大変だということで 1 週間に 1 回ずつにしていきました。そうしているうちに、福室市民センターとか田子市民センターも避難所になったため、福室市民センターにも行ったのですが、物資や情報量の違いを感じました。岡田小学校で知っている方が給食当番をされていたので、その方から物資をいただいて福室市民センターで調理してお昼を出したことも何度かありましたが、6 月 24 日まで 1 週間に 1 回ずつ、

避難者が仮設住宅やアパートに移って全部閉所になるまで続けました。私達は農家なので、JA 仙台の高砂の女性部と、それから知り合いや友人に声がけして、常時７～８人で最初は約 200 人の食事ということだったのですが、最後はもう 17、8 人くらいの食事になるまでずっと見届けました。確かに、救援物資でいろいろなものがあるのですが、それを作る人がいないのです。作ってくれる人がいないということなので作ると、今度は美味しくないとか弁当がいいとか、すごく気ままな人などいろんな人がいました。しかし、地域の中で女性がみんなでオニギリを作ったりいろんなおかずを作ったりということで、とても仲良くなれて、そういう面では町内でも女性部でそのようなつながりができたことはすごく良かったと思います。



〔司　会〕

ありがとうございます。困ったことだけではなくて、困った中でもいろいろな方々で助け合えたというお話でした。

では、皆様の発表を受けて市長からお話いただければと思います。

〔市　長〕

たくさんの方の貴重なお話、ありがとうございました。まず今回は皆様がおっしゃっていた情報が来ない、どうやって行政の情報を入手するか、行政に自分達の希望を伝えるか、そのどちらもできなかったのがおそらく一番大きい困難だったと思います。仙台市は行政ですので、前提としていくつかの情報連絡網を持っています。例えば、仙台市で災害時に優先的に通話できるはずの防災携帯の回線がありましたし、避難所と区役所、本庁を結ぶと防災行政無線というものもありました。それから、電気があればインターネットや FAX などいろいろなものがあるということで備えていました。ところが、今回は結論から言えば、携帯電話は全滅、本庁と区役所

の間の回線もほぼダウンしてしまい、時々つながる程度でした。私がどうしても伝えたいことがある場合には、20 回に 1 回ぐらい電話がつながるので、私の秘書に電話をかけ続けてもらいました。防災無線は基本的にはダウンしなかったのですが、使い方が特殊で通話がしにくい、長電話防止のために 1 回 3 分話すと自動的に切れる、それから操作手順が携帯電話や固定電話とは違うため事前に訓練を受けてないと難しいということがありました。そうすると、防災電話を配置したのが直近だった避難所については、防災電話を動かせる人がいない、または動かせる人が 24 時間いる訳ではない、あとは防災無線を動かすための非常用電源を動かす方のエネルギーが切れたなど様々なことがあり、結局情報連絡がすごく難しいという状況でした。情報を取りまとめて発信する仙台市の災害対策トップである市長でさえ情報が発信できない、入手できないと思っていたので、皆様はいかばかりかご苦労されたかとい思います。一番確実だったのは、紙に書いて誰かが自転車に乗るか、最終的には昔の飛脚、これしかないということでした。私もどうしても相談したいことがある時は、県庁へ歩いて行きまして、「すみません、仙台市長が来ていますから、知事に会っていただけますか、電話は通じませんでした」と向こうの秘書課の前で言っていました。これについては、やはり技術的な課題がありましたので、しっかりと通信会社ともう一度構築をし直したいと思います。例えば、今までの携帯の基地局というのは、一定の高さから電波を精度良くたくさん拾うためには、狭い範囲を一つのアンテナでカバーするという方が通常はよいのだそうです。ただ、その方法だと基地局が壊れると駄目です。防災のバックネット用として、性能は普段使っているコンパクトなものよりも落ちますが、より広いエリアを拡大して電波を拾えるアンテナもあるのだそうです。その両方を備えておくと、災害時にはその精度は落ちますがなんとか通信をカバーできるアンテナがより機能するのではないかなど、いろいろ専門的なことはありますが、連絡手段の確保についてはいろんな形で取り組んで、できればそれぞれの場所で確実に情報が取れるような体制を構築したいところです。

情報の発信としては、先程も少し話がありました避難所です。例えば、情報を大きな壁新聞にして貼るというのが、原始的で一番良いのですね。今回のことで私が思ったのは、原始的なものはどんな時でも壊れないということです。人間の足や人間の声が一番確実であったり、手書きの文字の方が良かったりしました。インターネットには仙台市もホームページで情報を出していましたが、皆様のところは全部停電していたので届くはずがありません。仙台市のホームページには書いてあるけれども、誰もそれを見ることができないなど、たくさんの反省がありました。例えば避難所にテレビを設置しようと思っても、テレビを置くアンテナ線そのものがありませんでした。だから、避難所からテレビが欲しいと言う話をたくさんいただいて、テレビは学校の中にいくらでもあるのだけれど、体育館にテレビのアンテナ線が来てないなど、いろいろな整理点が山のようにございました。この辺は、本当に考えていかなければならないことだと思っております。

ただ、先程もお話いただいたような、例えばご近所情報で水があるということが分かったという方は、結構多いです。仙台市では、今回水道の半分に当たる 50%が

ダウンしました。給水栓に関することや、給水車の給水場所に関する苦情を山のようにいただきましたし、最初は給水車の台数が少なすぎるというお話も随分いただきました。今回は小学校区で考えると大体 60 校区から 70 校区くらい断水したと仮に考えていただいて、仙台市は百万都市なので、周辺の都市に比べると膨大な数の給水車を仙台市だけに配置していただいたような状況がございました。仙台市には最大で全国から 75 台の給水車が入っていました。どのくらいの割合かというと、1 小学校区に 1 給水車が今回の状況なのです。当然大変な長さの人が並び、途中で水が無くなって、また水が来るまで待たされ、しかも給水に行った車が渋滞に遭って水源地に届かないなど、大変なトラブルがありました。しかし、例えば岩沼市は広域水道なのでずっと断水だったのですが、申し訳ないことに給水車は確か 2 台だったような気がします。ですから、全国の給水車を集めて人口割にして、不公平の無いように全国水道協会で配水した結果が 1 小学校区に 1 給水車でした。しかし、「何故これしか給水車が来ないのか」、「もっと集められるはずだ」、「市長は何をやっている」など大変なお怒りを受けまして、ただ水が行ってないのは事実ですので、私はひたすら平身低頭していた時期もございました。水が無くなった後は、次の給水が何時に来るか分かりません。そのような時に、給水タンクが地下にあってそこに給水栓があって水が出るような場所が何ヶ所かあるのですが、そのことをご存知の方とお知り合いになった方は、そこは水が切れることが無いので利用できたということがあると思います。そういう意味では、私どもの日頃からのライフラインの補完的な機能、つまり災害の時にどのような代替の手段があってどこまでだったら何が可能かというようなことを、やはりもう少し現実に即してしっかりと防災訓練の中などで皆様に周知しておくべきだったと改めて思い、反省点しているところでございます。

一番多かったのは、6月 12 日に 20 年間もあれだけ防災訓練実施してきたが、防災訓練の9割方は役に立たなかったという総括でして、まさにその通りでした。仙台市が行ってきた防災訓練は、今回のような水が半分無くなりガスが全面的にダウン、電気も点かないという中でどうするか、というような防災訓練ではありませんでしたので、防災訓練のあり方もしっかりと考えなければいけないと思います。また、先程は、西宮や神戸の方から大変迅速に、しかも適切なものが来たというお話がありました。これは友人同士でもそのようなことがあったのだと思いますが、確かに仙台市が行政として一番感じたのは、被災を経験した自治体は被災している自治体の今の状況というのを分かっていて、こちらからは何にも連絡できなかったにも関わらず、今まさに確実に必要な物を持ってきてくれたという経験はしました。仙台市が 11 日に被災した後、一番早く仙台に救援に来てくださったのは、新潟市消防局でした。夜の7時頃には新潟を出て、次の日の夜中の1時前には災害対策本部に支援に到着されました。その時には、水と毛布もしっかりと一緒に持ってきてくださいました。あと、同じ頃に出発された神戸市も、翌日の 12 日朝方には仙台市に到着されました。そちらの方も、本当に早かったです。神戸市は何を持ってきてくれたかというと、阪神・淡路大震災の時の行政対応時系列資料、つまり地震が起こってから何月何日に神戸市が何をしてどのようなことを実施したかを記録した1年分ぐらいある分厚い資料を持ってきていただいて、「これに市長さんが必要な情報の全てが入っています。これを見て、必要だと思えば指示されて、必要でないことはやらなくていいです」とおっしゃいました。仙台市もこれからもしどこかの市や町が何か災害に遭われることがあったら、本当にお役に立たせていただきたいし、役に立つような支援ができるようなノウハウを日頃から準備していきたいと思います。

新潟市さんからいただいた物で私が一番ありがたいと思った物は、仙台市では準備していなかった避難所で食べる食事のアレルギー対応食です。これを、何も言わなかったのに新潟から持って来ていただきました。避難所にこれだけ多くの方が避難しているからには、必ずアレルギーで困っているお子さんがいるはずだから、これは必ず使ってもらえるということで新潟市が保管していた子ども用アレルギー対応カレールーなどを持ってきていただいて、本当にこれは私もすごく嬉しかったところです。そのようなことも、仙台市としてはこれから考えていかなければいけないと思いました。岡田の方の話の中にありましたが、今回は仙台市の避難所に届ける物資の量が本当に少なかったです。仙台市は、これまで指定避難所として 200 程の市内の小中高を指定しておりました。仙台市が持っていた食事というのは、2～3日すれば電気が回復して水も回復し、そうするとご家庭をそれなりには片付けることができて、1週間ぐらい避難所を開設すれば、概ねの方はそれぞれのご自宅に帰ることができるという前提で準備されていました。今となっては、大変甘い避難所計画であり、今現在も応急仮設の準備が整わずに、このような長期に渡る避難所の運営ということを想定してなかった計画でした。また、避難所の自家発電設備が無かったことも痛かったです。例えば、夜トイレに行く時に自家発電が無い訳ですから、暗闇の中で大変苦労します。中学校の理科の先生がいろいろ考えて、子ども達の研究材料の豆電球と乾電池を直列に繋いで、トイレまでの廊下に一直線に並ぶ

ように誘導灯のように作ったら役に立ったなど、本当に皆さんのいろんな知恵と行動力でなんとか生き延びていただいたのがほぼ実態だと思っておりまして、本当にそれぞれの地区の方には、大変なご苦労をおかけしました。今日の皆様のお話も含めて、今回の避難所の開設と避難所の運営についてはたくさんの教訓がありますので、ご提案を全ての避難所からアンケートなどでいただきながら、これからに活かしたいと思います。

③「震災の復興に向けて、また、地域の防災上必要な取組みはどのようなことか」

〔司　会〕

それでは、次のテーマに移ります。③「震災の復興に向けて、また、地域の防災上必要な取組みはどのようなことか」です。今後どのようにしていったらよいのか、未来に向けてどのような準備をしていけばいいのか、ということを皆さんで話し合っていただきたいと思います。これについて、３つの視点からお話いただくといいのかなと思います。まず、「行政が取り組むべきこと」そして「私が取組みたいこと」、それから「地域において取り組むこと」の３つです。この３つの視点で話し合ってください。時間は 15 分を目標として、黄色い付箋を使って作業をしていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

（各班にてワーク実施）

〔司　会〕

それでは、発表に入りたいと思います。今回は、偶数のグループから発表していただきますが、８班から始めたいと思います。

〔８　班〕

行政が取り組むべきことに関しては、マニュアルを整理して欲しいです。町内会の役員をされて苦労された方から、地域によって、町内会によって取組みの格差がすごくあるということと、ボランティアや社協の方には情報が入っているはずなのに町内会の方には情報が来なかったということがありました。隣の町内会は電気が来ていて不便もなさそうなのに、自分のところはいつまでも真っ暗なままで、その時の差を埋めるような工夫を何かして欲しい、そのためのマニュアルを何か整備していて欲しいという意見がありました。

また、市職員が避難所を回る時に、できれば男女ペアでなるべく同じ方が継続して回るようにした方が、話もしやすく様子の変化も分かっていただけるのではないかということでした。女性の職員さんは女性の困ったことなどの話を聞くような体制を取ってもらうと、本当に欲しいものが、気持ちが伝わるように思いました。

あと、食事に苦労された方が多かったのですが、水が無いところで食事をするために乾物を調理する工夫や、粉からパンを焼くということをしていたおかげで買い出しに並ばずに済み、他の方々にもパンを配ることもできたので、他の方にも勧めたいです。あとは、電池が無くても手回しライトやラジオが有効だったので、そのような物を備えておくのは便利でした。携帯電話は使えなかったのですが、同家族が同じ携帯会社だと割引があるのでお得なのですが、一人使えないと家族全員使えなくなるので、携帯会社はバラバラだと誰かがつながるということもあり得ます。

必ずしも家族で１つの会社にするのは、防災上あまり望ましくないということがありました。

地域のこととしては、地域で井戸のある場所を知っていたので水を分けてもらって助かったとか、町内会の訓練がいつも日中で男性が中心という想定ばかりなので、男手が無い時や夜間の時、子ども達だけの時などでいろいろなシナリオを市が提示すると、具体的な訓練に繋がるのではないでしょうか。また、日常的に近所でご挨拶、お付き合いなどをしていれば困った時に助け合えるので、普段からの近所の付き合いが大事であるということ、またマンションについては高層階の場合水を運ぶのが大変だったのですが、若い人達が助け合って全部運んでくれたことがとても良かったということもありました。あとは、例えば名誉職のためご高齢な町内会長さんの場合、いざという時にご家族が連れていなくなってしまうようなケースもあり、実際に動ける町内会長さんになっていただきたいということもありました。

〔６　班〕

行政にして欲しいことはたくさん出ました。防災マップをもっと市民に知らせて欲しい、今後の震災の資料をきちんと残して後世に伝えるとともに、安否確認のシステムを導入して欲しい、さらに市長の話にも出ていましたが、情報をもっと出してほしいということもあり、職員の数をあまり減らさないで欲しいという意見も出ておりました。

また、繋がりを深めるというところでは、町内会では高齢の方がすごく増えているので、町内会の年齢層を広げるには、地域でのお祭りなどを行って繋がりを感じていけるようにしたらどうか、津波について学校などを通して紙芝居などで子ども達に津波を伝えていったらどうか、あと通常の時からコミュニケーションを高めることで非常時にも繋がりが活きてくるのではないかというお話がありました。

あと、子ども達の心のケアというのもとても大事であるということ、女川原発の情報を適切に知らせて欲しいという原発の話、自然エネルギーということで太陽光パネルの導入ということを進めていったらいいのではないかという話も出ていました。子どもを中心とした街づくりということで、子どもの視点を大事にして街を造っていけたらいいなあということを、個人的に思いました。

〔４　班〕

行政に取組みをお願いしたいことは、例えば、指定避難所以外にも食糧を届けるなど、もっと柔軟な対応をして欲しいということです。それから、指定避難所をもっと増やすべきである、またコミュニティ・センターを指定避難所にしたらどうかなどの話がでました。

私が取組みたいことは、これはほとんどの人が、もう少し自分で備蓄をした方が良いのではないかということでした。災害に備えてきちんと自分で対応しておくこと、３日間の備蓄を目標として欲しいということも出ました。それから、自分のことが自分でできるようにしておく、身近な人への支援もしたいと言っている方もいました。

地域において取り組むこととしては、新興住宅地は繋がりが薄いので町内会のあり方をもう少し指導して欲しいということ、町内会組織とは異なる地域の住民の防

災組織が必要ではないかということ、近所の２、３件隣はお互いに生存を確認できるようにして、住民、地域、町内会のコミュニケーションを活発にした方がよいのでは、という意見が出ました。

〔２　班〕

行政に対する要望は、仙台市の防災計画の関係でいろいろなパターンの防災訓練マニュアルの作成、それから復興計画の委員には 16 人中３人しか女性委員がいないため、例えば女性の方で障害を持っている方、外国籍の方、マイノリティの方々などを入れて、しっかりと私達の生活に根ざした計画にして欲しいということです。先程、通信手段のこともありましたが、災害用電話のＰＲや情報手段の確保というようなこともあります。それから、自然エネルギーの推進、また建物の耐震、宅地の開発の基準など、しっかりと次世代に繋げるように基準を厳しくして欲しいという意見も出ました。

自分のことは自分で守るということで、１週間くらいの備蓄は自分で確保しておくこと、両隣の方々と生存確認を行うなど、阪神大震災の時もお節介なおばちゃんがみんなの力になったということもありますので、それぞれが出せる力を巻き込んでいくようにしたいということでした。

地域では、例えば地域包括支援センターの機能です。民生委員さんと連絡を密にして、どちらかというと弱者と言われる方達の情報を共有しながらみんなで支え合っていきたい、地域の絆を持っていきたいです。また、行政に頼りすぎず自分達で考えた地域づくり、地域コミュニティづくりをしたいという意見も出ました。各年齢層がそれぞれ自分達の出せる力、暮らしなどをやっていきたいという、大変前向きな明るい意見が出ました。

〔司　会〕

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

〔市　民〕

私の団体は児童館を指定管理しているＮＰＯなのですが、今回児童館は避難所にもなりました。児童館も、指定避難所になった児童館とそうでない児童館があり、物資や毛布などに差がありました。小学校の避難所に、小さな子どもからお年寄りまでというのは、はっきり言って無理があると思います。それぞれに応じた避難所が、本当ならあったらいいのではないかと思います。小さい子どもがいるお母さん達は、体育館で子どもを泣かせることができない、それで児童館とかの方に避難してきた方もいました。あと、子ども達のトラウマになっている部分があると思いますので、今後子ども達に対するケアというのも考えていかなければいけないと思っています。

〔司　会〕

ありがとうございます。

あと、避難所をいち早く立ち上げて、非常に頑張って支援をしたという六郷地区の話を六郷の方からお聞きできればと思います。

〔市　民〕

私は、六郷地区の民生委員をやっています。私は別に特別なことをやったつもりはなく、地域の方との信頼関係の中で、常日頃考えているようなことを行ったという感じです。高齢者の方が独りトボトボ歩いていて、今日寝る所が無いということだったので、近くの町内の集会所を開いたところ、そこから人が集まって 70 人から 80 人ぐらいが集会所に泊まったと思います。自分達の町内会だけではなく、隣近所の町内会の方は勿論、どなたでも構わずに引き受けました。結局、別の町内会のところに行ったら断られてきたという方も結構いらっしゃって、被災した中ではみんな同じなので、誰も来る人は拒まず、また勿論出て行く人も拒みませんでした。あとは、たまたまプロパンガスが大丈夫だったので、個人のお宅で炊き出しをしました。人間は、温かいご飯と暖かい部屋、あと甘いものがあれば幸せになるのだなと、それはすごく感じました。それと、朝になって体を動かそうと声をかけたら、たまたまラジオ体操が始まったのです。では、みんなでラジオ体操したら、それとなく吹っ切れました。何も言わなくても、一人一人が片付けも、あと炊き出しも、何もこちらから言わなくてもやってくれました。特に、女性の方達はちょっとしたことで変わっていくのではと思いました。そして、避難所を閉じなければいつまで経っても自立ができないのではということもあり、ライフラインが戻って３日目で私達は避難所を閉じました。どうしても無理な方は、指定避難所の方に行ってくださいというお話しをしました。５日間泊り込んで避難所を開設し、特別なことはありませんでしたが、大体そのような感じでした。

〔司　会〕

ありがとうございました。これまで出していただいたのは、今後の避難所運営のことや行政にお願いしたいこと、私または地域で取組みたい将来の備え、そういったことを出していただきました。あと、現に避難所で生活されている方もいらっし

ゃいますし、仮設に移って行かれる方への支援も大事だと思うのですが、そのような部分について、少しお話しをお願いしたいのですが。

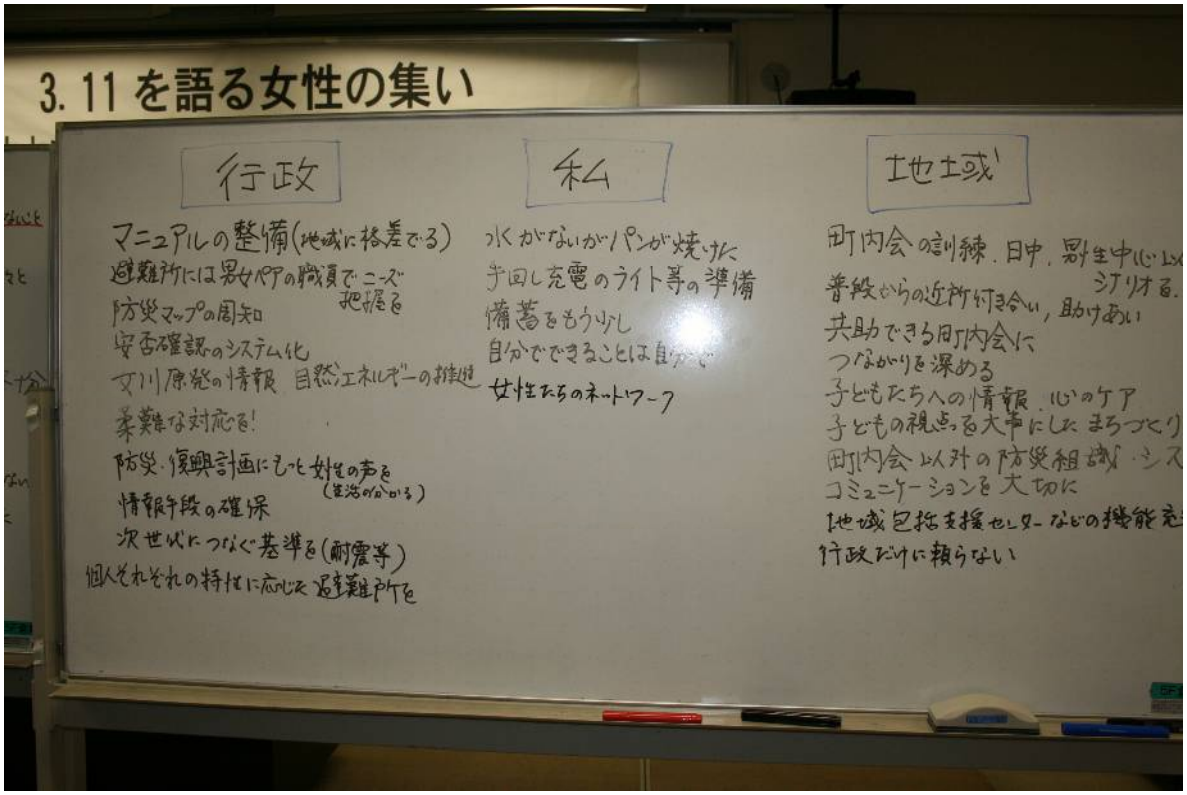
〔市　民〕

私達は、避難所の中でせんたくネットと言いまして、洗濯物を女性からお預かりしてボランティアの方々が自宅で洗濯をしてお届けするという活動をずっとしてきました。それで、仮設住宅に皆さん移られて来ていますし、それから避難所の方にも洗濯機が設置されておりますので、洗濯ボランティアは終了しました。現在は、その先ということで、仮設住宅に移られた方々への支援として、仮設住宅の中の集会場を使わせていただきサロン活動を始めています。そこに女性たちが集まり、楽しいことを組み合わせながら、お茶を飲みながらいろいろお喋りをしようというものです。私達は、被災地に住んでいる女性達はみんな被災女性だと考えているものですから、被災をして仮設住宅に住んでいる女性達だけではなく、空いているいろいろな公共施設を使用して、活動する新規の女性達にそこに集まっていただいて、同じような形のサロン活動をしております。実際に話し合いをしていると、直接的に被災していなくても、やはりいろいろな経験をして、いろいろな想いを持っている方がたくさんいることを感じます。女性達が心の回復をする必要がありますので、その取組みを仮設住宅だけに留まらず、公共施設をはじめとしたいろいろな施設で数多く進めて行きたいと思っております。

〔司　会〕

ありがとうございました。行政にとっても非常に役立つご提案がたくさん出てきたのではないか思います。

それでは、市長から感想と、皆さんからのご意見を聞いてのまとめをさせていただきます。



〔市　長〕

何人かの方からお話が出ていました、あらゆる時間帯であるとか、様々な条件に応じた、それぞれの時に参照することが可能な、これをマニュアルと言っていいのか何と言っていいのかはいろんな考え方があると思いますが、今までの避難所開設がたった一行か二行で、震災が起こった時には学校もしくは行政の職員とかが来て、鍵を開けて避難所を物理的に開けて、そうすると地域の方々で避難所運営委員会ができる。あたかも、カップラーメンにお湯をかけると黙っていても避難所運営委員会ができるというようなことが、これまでの地域防災計画には書いてある訳ですが、避難所運営委員会を立ち上げることがいかに大変なことであるか、勿論非常にスムーズに立ち上がったところもたくさんあるし、そういう訓練を一生懸命重ねられて地域の町内会としてそういう力を持って立ち上がったところもたくさんあるというのも、私も今回承知させていただいていますけれど、一方で立ち上がることができずに、行政の職員も行かずにご苦労された地域も多かったですし、そういったことに対して、例えば行政職員が来なかった時にどういうことが可能なのか、そういうことも含めていろいろなケースを想定する中で動きが可能になるようなものを考えて行きたいと改めて思います。

そして、物品、物資につきましても、今まではクラッカーですとかアルファー米でありますとか、乾パンでありますとか、そういうものを備蓄していた訳です。しかし、果たしてこれが一体何食続けて食べることが可能なのかも、もう一生分のアルファー米を食べたので見たくないという声も率直にございます。備蓄のあり方についても、どういう物を備蓄するかについても、いろいろ考えていく必要があるなと思っているところです。

情報システムについては、先程お話をさせていただきました。やはり、行政の１つの役割として、今日もいただいているような今回の震災に関する様々なお話、これは本当に被災地であるからこそ体験した悲喜交々を併せた大変貴重なことで、これをきちんと、別にこれが仙台市の行政がいかに失敗した記録だろうがなんであろうが、それを曝け出すことによって多分他の地域の方々も、こういうことが起こるのだろうな、ということを分かっていただくような、リアリティのある記録としてまとめさせていただいて、教訓としてご活用いただけるようにしていきたいと考えてございます。地域の方々のお互いの支え合いの第一歩として、地震の揺れが収まったら、お互い両隣の家くらいは「どうでしたか、大丈夫でしたか」と声がかけられるような関係というのが、何よりも求められていると思いますので、そういう関係で顔を合わせてどうでしたかと確認できるような関係づくりも、地域づくりと一緒に進めていければと思います。

先程、地域包括支援センターの話になったのですが、今回、地域包括支援センターの職員の皆さんは、大変頑張ってくださって、包括支援センターと何らかの形で関わりのあるご高齢の方については、お一人お一人について全員お会いいただいて、安否を確認してくださいました。その間、町内会とか民生委員の皆様にも、大変ご支援をいただきました。ただ、残念だったのは、包括支援センターの職員も大変なガソリン不足のために、最初の３日、４日、場合によっては１週間程ですね、肝心

の確認に行くための車にガソリンを入れられなかった。そのことがやはり、職員も残念でしたし、また私もそれだけのガソリンなり必要なエネルギーをそういうことのために確保できていなかったということが大変残念でして、どんな手立てを講じるにしても、そのために動ける人を確保するガソリンの問題、これは本当に行政にとって大きな課題であると思ってございます。それから、様々な避難所のあり方、そして、これまでの指定避難所だけではない、もうちょっといろいろな施設を使っていく場合の使い方のあり方、また、それから今回の学校もそうですけど、避難所を開設する時も大変でございますけれども、避難所を閉じていくことはもっと大変でございます。

これは、閉じられたご経験のある方は、一様にお分かりのことだと思います。指定避難所は行政の責任で閉じていくことになりますが、例えば町内会とかコミュニティ・センターとか、ある程度地域で開設された避難所がそんなに長くなるということは、やはりこれはちょっと難しい問題があるかなと思っていまして、そうした避難所の開き方と閉じ方の問題なども、これから考えていく課題かなと思ってございます。たくさんいただいた中で、全部お答えはできませんが、本当に貴重なご意見をいただいてありがたくございます。感謝申し上げます。

〔司　会〕

どうもありがとうございました。まだ、ちょっと時間がありますので、ぜひこの件については言っておきたいとか聞きたいという方は、いらっしゃいますか。

〔市　民〕

今度の震災では全国的に、あるいは国を越えて世界中から支援が寄せられたことがすごく大きかったと思います。そして、私は図書館に関する活動をやっておりますので、図書館の関係でも図書館の組織が、やっぱりすごく支援に入っていました。私達ボランティアもお手伝いをしたっていうこともあるのですが、それぞれのとこ

ろで自治体の専門家集団の力っていうのがすごかったと思います。

ぜひ、行政、仙台市もそれぞれの専門家を育てるような職員づくりをしていただければと思います。

〔市　長〕

今、図書館の話がありましたけど、被災してしばらくは、図書館も柱に穴が開いたり、泉図書館も壁の向こうは青空が見えたりする状況で、図書館も休まざるを得なかったのです。市民の皆様からも、いつになったら図書館は開館するのですかというお問い合わせが随分多くて、５月の連休になった頃に、やっと少しずつ、部屋に入ることが危ない図書館の場合は出店みたいにして、極めて普段からすると不十分な形だったのですが、開かせていただきました。その中で、メディアテークに入っている市民図書館が開館したのですが、その時には本当に驚くくらいの人が、別に大した宣伝はしてないのですけれども、ささやかに５月３日から図書館開きますくらいだったのですが、カウンターの職員が「今までこんなに図書館の貸し出しに並んだのを見たことが無い」というくらい、ものすごい人が来て並んでくださいました。しかも皆様割と静かに並んで、皆さん見るものが無いので、図書館職員のバーコードをなぞる手元を見るので、図書館の職員は「こんなに緊張してバーコードをなぞったことはありませんでした」と言っていたのです。やっぱりあの震災の時に誰しも、水のことを考え、食べ物のことを考え、寝る場所のことも考えるのだけど、やっぱり市民の方の中には本に触れたい、言葉に触れたいとか、またニュースが全部震災のことだけなので、どこかヨーロッパを旅している紀行を読みたいとか、全く違う世界に自分の頭を持っていくためにどうしても何か本を読まなくては駄目とか、この切実な本に対する想いがむしろ震災のために湧き出てきたみたいなことがありまして、かつて図書館長をわずかな期間でしたが務めさせていただいた私としては、本の力ということが改めてこの震災の中で分かって、ああ、素晴らしかったなと思いました。いろいろ怒られることもたくさんありましたけど、図書館を開けた時は褒められましたので、ありがとうございます。

○　閉　会

〔司　会〕

ありがとうございました。今日は本当に、生活の中から出てきたいろいろなご提案、ご意見をいただいたと思います。ぜひ、今後の仙台市の復興に向けてもですが、他の地域へ住む方へ伝える知恵として、蓄積していけたらいいと思います。今日は、本当に遅い時間までありがとうございました。

(3)　ワークショップで各グループの中で出された意見（付箋メモ）

各班にわかれて実施したワークショップでは、参加者それぞれの体験やご意見などを付箋に記載していただいて、それをもとに話し合いをしました。

以下の記録は、参加者に記載していただいた付箋の内容です。

なお、「◆」の分類は当日参加者に示した分類で、「〔　　〕」内の分類は当報告書をまとめる際に事務局で分類したものです。

○　震災から１ヶ月　「何をして何を思ったか」

◆　経験したこと

〔私のこと〕

・食料品の買い出し
・ガソリンや灯油の買い出し
・地域の集会所を避難所に
・水汲み
・物々交換
・自宅の片付け
・事務所の片付け
・県外からの物資の調達（関西方面から決め細やかな支援）
・情報収集
・友人宅を転々
・健康には気をつかっていた
・寺で供養
・仕事は自宅待機に
・津波のあとを一度見に行く
・腰が痛くて病院通い
・被災地ではない場所にいたため、毎日ニュースを見て涙が止まらず
・女性用下着やナプキンなどを被災地へ送付
・自転車を盗まれ、自転車を買った
・太陽とともに寝起き
・震災日記を作成
・被災地に救援物資を送付
・楽しかった自転車通勤
・雪を溶かしトイレ水として活用
・近所で水のある場所などの情報交換
・町内会の引継ぎ作業
・ボランティアセンターに通うことにした
・灯りがついたときに、本当に泣けた

・福島の原発事故が心配
・避難所に行き、市からの情報を入手

〔家族のこと〕

・入院中の夫に食料を届ける
・娘と孫は山形へ避難
・福島県に親を迎えに行き、一緒に暮らす
・家族で実家に避難

〔他者への支援〕

・被災者への生活支援
・一人暮らしの高齢者に水と食糧を届ける
・近所のお年寄りの見守り
・避難所にて避難者への世話
・高齢者の方々へ巡回
・不自由なことがないか町内を巡回
・昼食準備ボランティア
・避難所へ絵本などを届ける
・災害支援ボランティアで気仙沼へ
・支援の仕事をするために東京へ
・福島県へボランティア
・炊き出しのための食材探し
・避難所で必要なプロパンと米の購入を依頼
・避難所で１ヶ月炊き出しの手伝い
・他の避難所へ食事を届ける
・被災した子どもたちを対象としたイベントの実施
・避難所でママさんの心のケア
・オール電化住宅だったため、近隣の方へお風呂の提供
・ホームステイ受け入れ
・避難所で洗濯ボランティア
・知人などの安否確認

◆　困ったこと

〔物資の不足〕

・ガソリン不足
・ガスボンベがあれば良かった
・食料品の確保に苦労
・35 日目でガスが復旧。本当に困った
・１ヶ月ガスの供給を待たされた
・病院が開院しないため薬が手に入らず大変
・電気が通じず携帯電話が通じない
・オムツが買いに行けず、物資としてももらえない

・自宅に過ごす人に必要なものが届かない
・避難所ではない場所に避難していたために、情報や物資が来ない

〔情報の不足〕

・電話、電気やインターネットが使えず情報不足
・自宅にいると情報が届かない
・子どもと連絡が取れない
・親と連絡が取れなかった
・安否確認しようにも、電話が通じず大変だった
・町内会の名簿がなくて困った
・遠隔地に在住している子どもとの連絡に苦労

〔その他困ったこと〕

・職員が物資を人数分分けてくれなくて困った
・物流がとだえ、無力感を感じた
・家は全壊、片付けはまだまだです
・市民センターはもっと地域に開かれてほしい
・水汲みが大変。家の近くまで給水車が来ない
・デイサービスが来なくなった
・地震や津波の映像を見て、子どもたちが不安に
・パートの仕事が休みになり、このまま仕事がなくなるかと不安
・防災訓練は実際とは違いすぎる
・物流がとだえ、無力感を感じた
・夫の職場がなくなり、自分自身が喪失感
・津波がトラウマに
・子どもを預ける場所がない
・子どもへのケアが大変だった
・子どもの合格発表や入学式が遅れ不安定に
・原発が心配
・近所づきあいなく、孤立感
・ボランティアをしたくても、ボランティアをする方法がわからない

◆　考えたこと

・みんなで我慢
・どうすれば命を救えるか考えていた
・自分の生き方を見つめなおした
・支援活動している人は素晴らしい
・自分の無力さ
・津波被害があった地域にこのあと住めるのか
・子どもの安心が第一
・避難所暮らしを早く解消させてあげたい
・原発事故の心配

・仙台市の備蓄はどこにどのくらいあるのか
・ＮＰＯは何をしなければならないのか

◆　気づいたこと

〔感謝〕

・水の大切さを実感
・この時代に生き抜いた自分は「生かされている」と実感
・人の温かさを感じることができた
・コミュニティの絆の強さ
・町内や近所の助け合いの強さ
・周りの人に感謝感謝の日々
・我が家以外にも小さな子連れの家族が避難所にいたので、安心した
・介護スタッフが雪の中、安否確認に来てくださりプロ根性に感激

〔避難所〕

・避難所によって情報や物資に大きな差があった
・女性に対するセクシュアルハラスメントがあることを知った
・避難所の夜、女性たちの夜のおしゃべりが興味深かった
・避難所でお年寄りが大きな鍋を持てず大変そうだった
・避難所支援を通じ、女性たちが過酷な状況であったことを実感
・気仙沼の避難所での食事内容は栄養価が足りない状況
・指定避難所以外にも避難所は必要だった。行政の支援が必要。

〔ジェンダーの視点〕

・男性は指示をする立場になりたがり、身体を使って働くのは女性
・具体的な指示を出すと男女にかかわらず仕事をしてくれる
・普段から家事などしている人が、非常時にも動けた
・町内会や女性たちのネットワークが重要だということ

〔その他気がついたこと〕

・電気やガスを当たり前のように使っていたことを反省
・コンビニを緊急時の備蓄等に使えるかと思ったが、機能しなかった
・一人暮らしは不安と気楽さを併せ持つ
・片付けをしたら、物に囲まれた生活から開放されすっきりした
・必要なときに必要な物資を届ける人材不足
・耐震対策をしっかりした家は、震災後の生活を早めに回復できる
・支援物は届くものの、必要な物が必要な人に届かない
・食事の準備をする人をコーディネートする人の不足を感じた
・津波の映像ばかり
・被災地の報道に驚かされた
・テレビの津波ばかりの報道にうんざり
・家族が被災すると、自分自身が傷つく
・家族が被災した方は心が傷つくので、そのフォローの方法が問題

・日々の生活が原発に左右されてしまうこと
・温かい食べ物と部屋、甘いものがあれば人間幸せになれる

◆　限界を感じたこと

・自分は何ができるのか、わからなかった
・自分も何かをしなければと思いつつ、気持ちがついてこなかった
・ボランティアをしたいが、何ができるかわからずに気が沈む
・食べ物ではなく、サプリメントが届いたのはミスマッチを感じた
・避難所にいる留学生が泊まりに。結局情報がある避難所に帰った
・津波で約 60 人亡くなっている地区なのに、メディアに取り上げられなかった
・余震がいつ起こるか不安
・余震の強さ・多さに恐怖感
・呆然自失
・繰り返される津波の映像に恐怖を感じた
・給水が大変、ガソリンもなくなった
・行政の対応、来ない、遅い、まずい
・高齢者・身障者への支援がなかったので、家族は大変
・職場でシフトを組んだため、支援活動に参加できなくなった

○　「震災の復興に向けて、また地域の防災上必要な取組みはどのようなことか」

◆　行政が取り組むべきこと

〔法律、条令等の整備や計画等の策定など〕

・災害がきても大丈夫なように、マニュアル整備を
・マニュアルについて、さまざまな事例検討を
・きめ細やかな防災マニュアルの策定を
・耐震基準をもっと厳しく
・復興会議に女性委員を増やす
・宅地開発の基準を厳しく
・防災計画づくりにマイノリティの意見が反映できるようにしてほしい

〔情報〕

・支援が必要な世帯への定期的な情報提供
・防災無線、情報伝達の徹底
・通信手段の確保
・情報の集約する場所を決めておく
・的確で正確な情報発信
・平時からのネットワークをしっかり
・災害用電話のＰＲ
・双方向コミュニケーション手段の確立

・情報発信をもっとすべき
・津波について学校を通じて紙芝居等で伝える
・今回の震災をしっかりと記録として残す
・今回の震災を後世にきちんと伝える
・情報を一元化している情報ステーションの設置
・情報の格差があった
・行政と町内のつながりや信頼関係の構築
・安否情報システムの導入
・支援団体ごとの支援内容をつかみ、災害時に要請してほしい
・防災マップをもっと市民に伝えてほしい

〔避難所〕

・指定避難所をもっと増やして欲しい
・指定避難所以外にも食料を届けて欲しい
・避難所の整備充実
・大規模避難所だけではなく小規模避難所の設置を
・児童館を避難所にするなど、弱者のための避難所のあり方の検討
・すべての避難所にガスボンベと水の確保を
・指定避難所の見直し
・避難所での赤ちゃんや老人／婦人などへの支援を
・備蓄物品の明示
・避難所運営に女性の視点を入れるために、女性の運営委員を入れる
・コミュニティ・センターも指定避難所にしてほしい
・学校以外の福祉施設なども指定避難所へ
・市職員が避難所を訪問する際は男女ペアでなるべく継続して同じ人を
・コミュニティ・センターに防災グッズをもっとそろえる
・コミュニティ・センターの充実

〔支援〕

・子どもへのケアが大事では
・復興事業への支援
・ボランティアのコーディネートをしっかりと
・復興へのお手伝いがしやすい仕組みづくり
・被災者に決め細やかな支援を

〔その他〕

・役割分担は男女半々にする
・新興住宅地の町内会がまとまるようにすべき
・防災訓練を夜に実施するなど、市があらゆるシナリオを想定して提示すべき
・ガソリンの確保
・食糧の確保
・柔軟な対応
・仕事づくり

・想定は最大限に。十分な備蓄を
・ソーラーシステムの設置
・行政に女性がもっといるべき
・市職員の数を減らさないでほしい
・省エネルギー対策
・沿岸に風力発電
・太陽光パネルの設置
・女川原発の状況など放射能の状況を適切に知らせる
・学校、幼稚園・保育園や公園での放射能測定
・給食は自校方式を
・原発にオールマイティに対応できる専門部署の設置
・移動診療所の設置

◆　私が取組みたいこと

〔備え〕

・最低３日間の食料の備蓄
・食糧の備蓄を各家庭できちんと行うようにする
・一週間生きられる食糧、水、灯油等の確保
・常日頃の防災の準備
・防災意識の向上
・防災備品をきちんと揃える
・水・食糧・懐中電灯の準備
・車のガソリンをきちんと入れておく
・常に最悪の事態を想定して資源の確保

〔防災に関する心構え〕

・被災状況が軽い場合は、自宅で人の手を借りながら暮らす
・被害が小さいときは、行政の手を借りない
・非常時の用意・点検
・自分のことは自分で守ることを考える
・災害時の対応を家族で話し合う
・家族内で避難所の確認をしておく
・自分の家、家族の防災に努める
・通常時からコミュニケーションを高めておく
・（周囲との）つながりを日常の中で作っていく
・近所づきあい
・子どもを通じた人間関係づくり
・身近な人への支援
・体力の維持
・度胸をつける

〔その他〕

・防災の取組みを男性任せにしない
・多言語、アレルギー障害など少人数に配慮
・子どもとの遊びを通じて、子どもの心のケアを考える
・子どもの長期的な心のケア
・災害時の生活技術の伝達
・震災時の知識やスキルを身につけ、子どもに伝える
・地震当時の言葉、メール、行動を書き残す
・震災を承継する
・日頃の片付け
・不用品の処分
・自給自足
・震災と女性をテーマに調査研究を行う予定
・隣近所の生存確認を、自分でできるようにしておく
・住民・地域・町内会のコミュニケーションを活発にしたほうがよい

◆　地域で取り組むこと

〔近所のつながり〕

・地域の結びつきを強める
・周りの人と仲良くしておく
・近所の人の生存確認
・隣近所の人が知り合えるまちづくり
・日常的に近所であいさつをしていると、困ったときに助け合える
・隣近所の情報収集
・行政に頼りすぎず自分たちで考えた地域づくりをする
・災害時には普段からのコミュニティが問われる
・頑張り過ぎないための声がけ
・通常時からコミュニケーションを高めることで非常時につながりが生きてくる
・地域でコミュニケーションをとっておく

〔町内会等〕

・若い人たちがもっと活発に町内会活動を
・町内会の年齢層を広げる
・地域のお祭りなどを通じて、町内会活動に若い人を引っ張り出す工夫が必要
・炊き出しなど現実に即した準備を見直す
・食糧や生活支援物資不足に際し、地域町内会単位で準備を心がける
・食糧ストックの場所の公開
・災害マップづくり（避難所・水・食料）
・地域内の情報の周知
・障害者、高齢者、妊婦などの情報把握
・町内会で防災について話し合う

・町内会と町内会にある店で、地域が元気になることについて話し合う
・住民（町内会）のコミュニケーションをしっかり
・自主防災組織を立ち上げる
・各年齢層が協力できる組織
・町内会の防災組織が全く機能しなかった
・地域での祭りや活動を行う
・集会所等での避難生活を想定した町内会の取組み
・赤ちゃんから高齢者まで参加できる土日を利用した避難訓練
・民生委員や近所の人とスムーズに助け合えた
・町内会組織とは異なる、地域住民の防災組織が必要では
・住民情報を社協の福祉委員会でも把握することが必要
・町内会長はご高齢の方ではなく、動ける人になってほしい

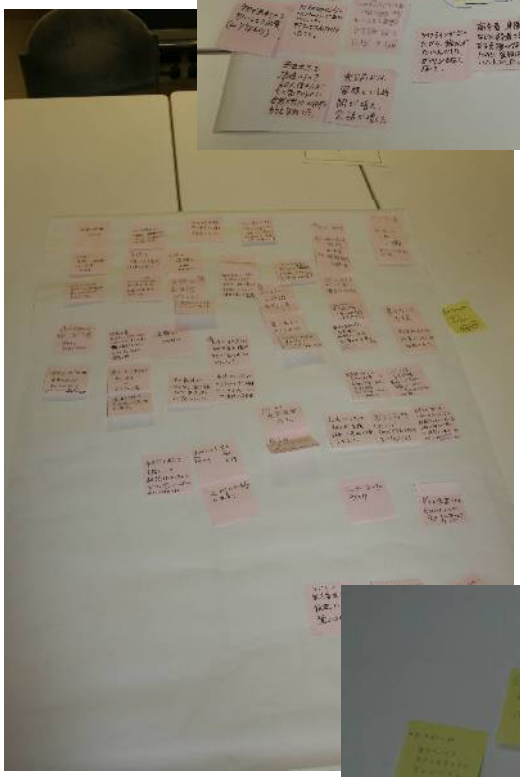
〔その他〕

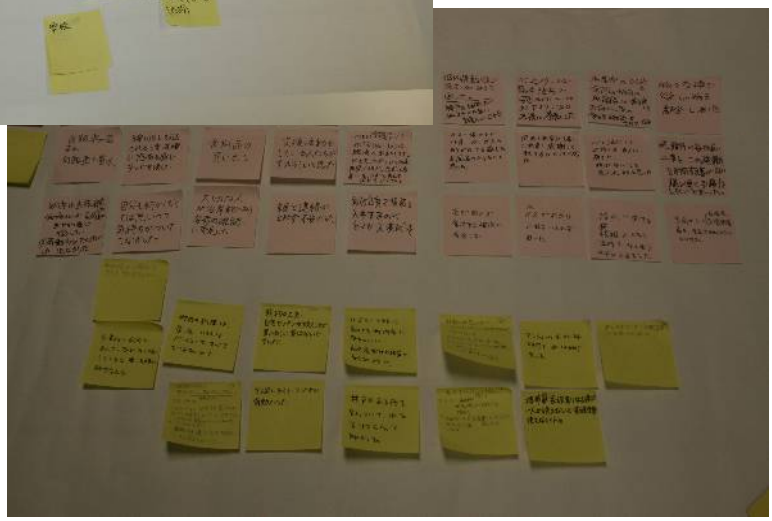
・復興へのお手伝いがしやすい仕組みづくり
・公正な水の配分
・地域の絆
・おせっかいな人たちが力を発揮できるような仕組みづくり
・各世帯の連絡網
・ボランティア希望者と災害弱者をつなぐ仕組みづくり
・心を一つにして頑張りたい
・子どもの遊びを通して、子どもの心のケアを考える
・役に立つ防災訓練の実施
・団地造成を行った地区は、行政とタイアップし地盤強化
・町内会で個々の変化を可能な限りで確認する
・子どもを中心としたまちづくり
・地域性をふまえた防災訓練の実施や防災計画の検討
・地域リーダーの養成
・地域包括支援センターと民生委員の連絡を密にして弱者と言われる方々の情報を共有しながら支えあいたい。
・自分たちの地域は自分たちで頑張ろう

◆　その他

・原発に不安
・ストーブが役に立った
・行政の職員が減ることは市民サービスの低下になるのですべきではない
・行政に頼り過ぎない
・町内会の役員をした方々がとてもご苦労されていた
・行政職の方々にも心のケアが必要では
・自衛隊は国土防衛隊になったほうが良い
・地域のことや行政のことはずっとその土地にいなければわからない

・自宅でパンを焼くことで、買出しに並ばずにすんだし、人に分けることができた
・原発の情報をしっかりとしてほしい
・手回しライト・ラジオが有効だった
・沿岸に風力発電
・井戸があるところを知っていて、分けてもらって助かった
・大人への心のケアを長期的に
・携帯電話の家族割はお得だが、使えないと家族全員が使えない
・記録を残す





３　アンケート集計結果

○　開催日時　平成 23 年７月６日（水）　午後 6 時 30 分から
○　開催場所　エル・パーク仙台　セミナーホール１・２
○　参加人数　６９名
○　アンケート回収数　５９名（回収率 85.5%）

(1)　参加者の属性

年代

20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上	無回答
2	7	5	13	17	13	2
3.4%	11.9%	8.5%	22.0%	28.8%	22.0%	3.4%

所属

パート・アルバイト	会社員	公務員	NPO 職員	学校関係	専門職
4	4	1	4	2	2
6.8%	6.8%	1.7%	6.8%	3.4%	3.4%
男女共同参画推進団体	主婦	自営業	無職	その他	無回答
4	15	4	7	8	4
6.8%	25.4%	6.8%	11.9%	13.6%	6.8%

住所

青葉区	宮城野区	若林区	太白区	泉区	その他	無回答
18	4	13	8	12	3	1
30.5%	6.8%	22.0%	13.6%	20.3%	5.1%	1.7%

(2)　本日のワークショップを知ったきっかけ（複数回答あり）

仙台市 HP	財団 HP	チラシ	仙台市からの DM	財団メールマガジン	新聞等	友人・知人	その他
6	3	19	15	2	3	14	5
10.2%	5.1%	32.2%	25.4%	3.4%	5.1%	23.7%	8.5%

(3)　本日のワークショップの評価は

4	3	2	1	2.5	無回答
4 非常に満足した　3 満足した　2 物足りなかった　1 不満だった					
14	35	2	2	2	4
23.7%	59.3%	3.4%	3.4%	3.4%	6.8%

評価の理由

（様々な話が聞けて良かった）

・ワークショップで出席者が体験や意見を述べたことは良かった。
・様々な立場の方々の意見を聞いたことでこれからの課題が見えた。
・初めて聞いたり知ったりしたこともあり、参考になった。
・いろいろなお話が聞けて勉強になった。
・様々な女性の視点、活動を知ることができた。
・いろいろな職種の方々の考え方を聞けたことが良かった。
・多くの人からの意見が聞けた。
・いろいろな人たちの体験を聞けた。
・様々な立場で様々な経験をした方々との情報交換ができた。
・いろいろな話を聞けて良かった。
・いろいろな経験、大変さを間近に聞き、勉強になった。
・様々な意見が聞けて良かった。
・様々な年代の人が集まっていたので、いろいろな意見が出た。
・他の人の状況を知ることができた。
・震災時の気持ちを共有し、近所の人だけではなく多くの人とつきあえる気分になった。
・自分自身の被災経験を振り返る機会となった。様々な方々の話を直接聞くことができて良かった。今後について前向きに考える女性の視点に立つ意見をたくさん聞くことができた。

（良かった）

・気軽に話ができる雰囲気で良かった。
・グループの意見がほぼ同一であり、同じ目線で考えられたのが良かった。
・女性の声を聞いて頂けるチャンスをいただけてよかった。
・市長自らが参加し、意見の交換ができた。
・みんなの元気な顔を見ることができた。
・「女性ならでは」の話が聞けて良かった。地域の中で語り合いたいと思う。
・話し合いの機会を持つことができて良かった。
・とても建設的な女性ならではの意見が多かった。
・また参加者の年代層が幅広くてよかった。
・様々な経験をした方々が、ざっくばらんに話し合える場であったこと、市長がきち

んと答えてくださった。

（今後に期待）

・震災直後の市の動きを聞くことができて有意義だった。この経験を新しい仙台のまちづくりにぜひ活かしてほしいと思う。行政がすること、市民のできること、それぞれが役割を分担していきたいと思う。

・女たちがつくる計画を今後続けてゆければと願う。

（時間が足りなかった）

・時間切れになった人がいたのは残念。

・もう少し時間があっても良かった。

・時間不足。

・テーマに沿った話し合いで進んだが、話足りないように感じた。

・時間の関係もあるかと思うが、もっと話し合いの時間が必要でなかったか。

・グループで、この人数と時間では一人ひとりの話を十分に聴けなかったし、話ができなかった。

・思いがたくさんあるのに、時間が足りない印象。このような機会がもっと欲しい。

（運営に関する不満）

・もっと広報してほしかった。

・夜ではなく昼間の時間にしてほしい。

・各テーブルが近すぎて、テーブル内の声が聞き取りにくかった。もう少し少人数のテーブルだと良いのかなと思った。

・今の市の状況がどこまで回復しているか知りたかった。

・もっと的を絞った内容のほうが良かった。

（その他）

・途中、作業を抜け、申し訳なかった。

・女性たちの集まりを期待していました。

・流出家屋の土地等のことを詳しく知りたかった。

・今から生きるためになる。

・市長が近くに感じられたこと。

・終わっていない現状をしっかり見ているのかなと不安になりました。

・被災の状況により温度差を感じた。

・どう活かすか注目しています。

・この時期に実施できたことが良かった。

・本音が伝わってきた。

・私自身は被災者といっても軽微だったので、皆さん語りたかったのだなと思った。みんなの意見から教えられることが多かった。

・市に対する要望を出すことができたこと、市としてやれることや限界を知ることができたこと。

(4)　その他ご意見がある方は、以下にご記入ください

【震災や復興に関する取組みなど】

（改善・提案）

・ボランティアの受け入れをもう少しスムーズにしてほしかった。
・今回の震災の記録をきちんと残し、今後に役立つ情報としてまとめていくのが大切だと思う。
・地域のサポートセンターを仮設住宅に設置しているが、一人ひとりのサポートをするためにはケースと情報が必要です。また福祉部門との連携も必要です。委託者は個人情報の壁で困っています。部局との連携を早急に願います。
・行政・地域・個人がさらに減災について今回の震災を活かしていくことが大切だと思う。ライフラインがない中で動けるように。
・女性はパワーがあります。年配者・主婦は生活感があり、人生経験も豊かで備蓄（物資・食糧・金銭等）もあり。どんな状況でも何とかやっていこうとしています。若い学生さんなどは、物資、食糧、金銭等の備蓄もなく、サバイバルするだけの人生経験もなく困ったそうです。あるのは若さと体力だけ。それを活用して避難所の運営に活かせたら、年配者も若者も助かったのではないかと思う。
・障害を持っている子を育てている方々が、話をしていたのは、食べ物の好き嫌いが激しく、普段食べているものが入手しにくくて困ったというので、お店の情報等を得る手段があると助かったと話をしていました。
・コミュニティ・センターも避難所に指定して欲しい
・震災体験を共有し、伝えていくことは必要。
・個人が災害に常に備えておく心がけが必要だと思った。物資や水、これだけの災害で、バスが早く走り、情報がテレビやラジオに常に流れていたのは良かった。
・義援金の配付を早めてほしい。
・幼児を連れて避難されていた方もいたが、オムツ不足だった。早くいろいろな種類のものを配達してほしい。
・仮設住宅のプレハブは、これから夏になり大変だと思う。木造なら住みやすいと思う。
・地域福祉計画の策定を早急に望みます。
・社会的弱者（高齢者、障害児・者）の避難所の設置の方法について検討する委員会を立ち上げてほしい。
・市民がスムーズに動けるように、特に町内会は男女必ずいた方が良いと思いました。
・高齢者宅にケアマネージャ、支援センター、民生委員と三者が同じことを聴きに行く、こられたほうも大変ではなかったか。
・非常時のための準備など広報していただければと思う。
・仕事づくりが次の大事な行政の協働作業であろうと思う。NPO や企業の協力を得て、地域のための仕事を作っていく必要があると思う。
・放射能情報を正しく理解し、行動すべき。そのためには、信頼できる情報がほしい。

【ワークショップに関するもの】

（改善・提案）

・短い時間の中で３つのテーマで話し合うことは難しい。「震災の復興に向けて」を中心に話し合ったほうが良かったと思う。

・ワークにファシリテーターが入っていたら、もっと意見が出たかもしれない。

・本日出された意見について、一つ残らず集約して、それぞれの責任において行っていかなければならないと思う。行政だけでは行えないのに、行えるかのように請け負うことは危険であると思う。

・今回は防災のあり方についての会だったと思うが、今後の復興・まちづくりについてさらに回数を重ねて欲しい。子ども、さらにその子と長いスパンで考えられるのは女性だと、今回の震災で実感しています。

（不満）

・不満だらけで二度とワークショップには出席したくないと思いました。

・今回のワークショップの集まりに、マスコミが入ることを知らなかった。チラシにも書いてなく、入口にも知らせがない。次回から参加しようという気持ちにとてもならない。

・はじめに司会が発表者を決めるよう指示してからグループワークをはじめたほうが良かった。

（その他）

・3 月 11 日を境に、女性ではあっても大黒柱となることとなった。心細い思いをしていましたが、勇気をもらえました。ありがとうございました。

・このように集まって話をすることで、自分も経験、人の経験の話をしたり、聞いたりするのは非常に気持ちが楽になり、今回考えたこともあったので、良かったと思う。

・昼間人口の多い仙台市の取組みについてお聞きしたいと思った。（市外からの通勤、通学者への取組みなど）

・また何ヶ月か後にこのような集いの会を開いてほしい。

・自分だけがこういう気持ちでなかったと改めて思ったので、良い機会だった。

・今日話し合ったことをぜひ行政に役立ててほしい。

・ただの集いに終わらず、実際に様々な意見をこれからの復興に活かしてほしい。

・女性だけで震災を語るこのワークショップは、とても楽しいひと時でした。

・経験したことがなかったことの話を聞けて、本当に助かった。

・いろいろな話し合いの結果、ぜひ集約して市民の皆様のもとに届けてください。市民の考える材料にきっとなると思う。

・どのような進め方をするかを知らずに参加しましたが、いろいろな立場の方が意見を出し合うことで深まりました。とても良い企画だった。

【その他】

・柔軟で迅速な対応を。上におうかがいをたてて行動に移すのではなく、現場の判断が必要な場合がある。

・仙台市職員の方々の仕事に感謝しています。いざというときに市民を守る砦になってくださったと思う。
・仙台市長は、忙しいでしょうが、もっとマスコミに出て姿を見て市民を励ましてください。市民も市長さんの顔と声で元気になると思う。
・仙台市の職員数を減らすことなく、いざというときに力を発揮できる市役所にしていただきたいと思う。

3．11を語る
女性の集い

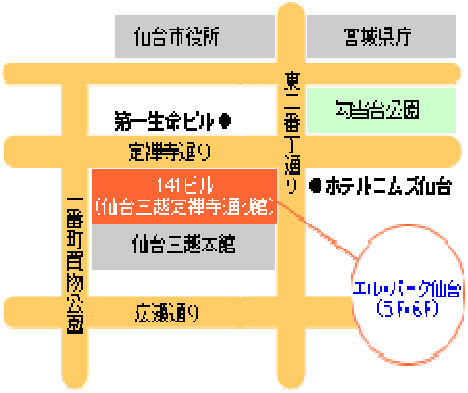
～市長とともに、まちづくりを考えるワークショップ～

今後の震災復興計画の策定や復興に向けたまちづくりに女性の視点を反映させるため、震災の体験を語り合い、復興に向けての行動、未来に向けたまちづくりについて奥山仙台市長と意見交換を行います。

日　時
平成23年7月6日（水）
18時30分～20時45分

会　場
エル・パーク仙台
５階　セミナーホール
（仙台市青葉区一番町四丁目11番１号
141ビル（仙台三越定禅寺通り館）５階）

〔会場（エル・パーク仙台）案内図〕



定員　１００名〔先着順〕
※定員に達し次第、申込を〆切させていただきます。

申込：6月20日（月）から
※氏名、連絡先、託児の有無をお知らせください
① 電話：022-214-6143
（月～金曜日の９時から17時まで）
② FAX：022-214-6140
③ Ｅメール：sim004180@city.sendai.jp

託児をご利用の方へ
＊ 託児をご希望の方は6月29日（水）までに、下記のお問い合わせ先までご連絡ください。
＊ 託児の対象…６ヶ月から未就学児まで。託児利用料として300円を負担していただきます。

お問い合わせ先　　仙台市 市民局 男女共同参画課
TEL：022－214－6143　　FAX：022－214－6140
メールアドレス：sim004180@city.sendai.jp

3.11 を語る女性の集い

～市長とともに、まちづくりを考えるワークショップ～

平成 23 年7月6日
18 時 30 分から
エル・パーク仙台
セミナーホール

〇開会

〇奥山市長からのあいさつ

〇ワークショップの進め方の説明

〇ワークショップ

① 「3月 11 日　そのときあなたは」

② 「震災から１ヶ月　何をして何を思ったか」

③ 「震災の復興に向けて、また地域の防災上必要な取り組みはどのようなことか」

〇意見交換

〇閉会

※ お配りしましたアンケート用紙に記載のうえ、会場出口の回収箱にお入れいただくか、出口近くの職員にお渡しいただくよう、ご協力願います。

3.11 を語る女性の集い
～市長とともに、まちづくりを考えるワークショップ～
アンケート

本日は、「3.11 を語る女性の集い」にご参加いただきありがとうございました。

今後のセミナー等の企画や施策の参考にいたしますので、アンケートにご協力いただきますようお願いします。

（あてはまる項目に○をつけてください。）

１　あなたのことについてお聞きいたします

年代：　１０代　２０代　３０代　４０代　５０代　６０代　７０代以上

職業所属

・学生・パート アルバイト・会社員・公務員・NPO 職員・学校関係（教員・職員）
・専門職（弁護士・医師・会計士等）・男女共同参画推進団体・主婦・自営業・無職
・その他（　　）

ご住所：　仙台市内（　　区）　　その他

２　本日のワークショップは、どのように知りましたか？（複数回答可）

⑴ 仙台市ホームページ　⑵ （財）せんだい男女共同参画財団ホームページ　⑶ チラシ
⑷ 仙台市からの DM　（5）（財）せんだい男女共同参画財団メールマガジン　（6）新聞等
⑺ 友人･知人からの紹介　⑻ その他（　　）

３　今回のワークショップの内容について、下の表の評価欄のいずれかに○をつけていただき、ご意見があればコメント欄にご記入をお願いします。

４：非常に満足した　３：満足した　２：物足りなかった　１：不満だった

評価 （よい　→　悪い）	評価の理由
４・３・２・１	

４　その他ご意見がある方は、以下にご記入ください。

（書ききれない場合には、裏面もご利用ください。）

ご協力ありがとうございました。この用紙は会場出口の回収箱にお入れいただくか、
出口近くの職員にお渡しください。

仙台市男女共同参画課

３．１１を語る女性の集い

実　施　報　告　書

平成 23 年９月

発行　　仙台市市民局男女共同参画課
住所　　〒980-8671
　　仙台市青葉区国分町３丁目７番１号
電話番号 022-214-6143
FAX　　022-214-6140